



2021年ワールドキャンサーデーにあたって

UICC日本委員会委員長
野田 哲生

新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威をふるい、がん医療は世界中で未曾有の事態に直面し、多くの方々が、苦難のなかにおられたと思います。人と人の繋がりを分断し、ソーシャルディスタンスという距離を私たちに強いている中、2021年のワールドキャンサーデーを迎えることとなりました。

ワールドキャンサーデーとは、ジュネーブにある国際対がん連合 (UICC) 本部がイニシアティブを取り、世界全体が一体となって対がん運動に取り組むことを促進するため、2000年パリの世界がんサミットで採択されたパリ憲章によって毎年2月4日を記念日として定めたものです。

がんに関する意識と教育を高め、世界各国の政府から個人ひとりひとりが行動を起こすことにより、毎年、数百万人の予防可能ながんによる死亡者を削減する

ことを目指しています。2009年からほぼ毎年恒例に、UICC日本委員会はこの記念日に合わせ、シンポジウムやライトアップイベント等を開催して参りましたが、今年はコロナ禍ということもあり、多くの方々にご参加頂くような大規模イベントは自粛し、オンラインによるライトアップ点灯式「LIGHT UP THE WORLD」の開催、並びにワールドキャンサーデーセッション等をオンデマンド配信することと致しました。

UICC本部は2019年から3年間の対がん運動キャンペーンとして「I AM AND I WILL-私は今、そしてこれから私は」をテーマに打ち出しています。私達はこのテーマをもとに、がん治療・予防の専門家、がんサバイバー、がんサバイバーを支える方々と協力し、自分は今からどのようにしてがんに向き合っていくかを語り合い、発信する場を創造していきたいと考え、イベントを



企画して参りました。今回のゲストである吉永小百合さんは、5月公開映画「いのちの停車場」で、がん患者とも向き合う医師役として出演しており、ビデオメッセージをお寄せ頂いた坂本龍一さんは、直腸がんを公表し、まさに治療に向き合っているさなかということから、このお二方にご登壇をお願いしご快諾を頂きました。

また、ライトアップはワールドキャンサーデーの象徴的な活動として、本委員会メンバーの皆様にも呼び掛けを行いましたところ、全国各地の多くの施設から手を挙げて頂き、全国で計16か所のライトアップを実現することができました。

前回に引き続き、今回も特設サイト (URL <https://worldcancerday.jp/>) を活用する他、FacebookやTwitterなどSNSを用いたキャンペーンも展開しました。特設サイト内ではYouTube動画で点灯式の模様をLive配信し、点灯式終了後にはワールドキャンサーデーセッション (全12セッション) とグローバルリーダーズメッセージ (8名) のオンデマンド配信を行い、世

界中の人々に視聴して頂ける環境を整備しました。

当日は18時の一斉ライトアップに先立ち、17時30分に河原広報委員長のナレーションによりイベントが開始されました。メイン会場である東映(株)本社に、ゲストの吉永小百合さんをお迎えしてのトークセッションを、中釜幹事とともにいながら、坂本龍一さん、全国のライトアップ施設のご関係者、さらにはワールドキャンサーデーセッションを企画頂いた先生方からのビデオメッセージを拝見し、その様子を配信いたしました。そして、いよいよ時計が18時に近づくと、ステージ背面に映し出された全国16か所のライトアップ施設を見つめながら、5秒前からのカウントダウンで点灯の合図が送りました。「5、4、3、2、1、ゼロ!」の掛け声とともに各施設一斉にUICCカラーである「ブルー」と「オレンジ」



カウントダウン

CONTENTS

挨拶	野田 哲生	1
ワールドキャンサーデー		
ライトアップ ザ ワールド.....		6
UICCワールドキャンサーデー2021に参加して.....	宮崎 龍彦	7
2021年ワールドキャンサーデーに参加して.....	中島 仁司	8
がん対策の今と未来をつないだライトアップ.....	石田 一郎	9
ワールドキャンサーデーセッション.....		10
World Cancer Dayを終えて.....	石谷 邦彦	15
ワールドキャンサーデーによせて.....	澤田 守男	16
グローバルリーダーズメッセージ.....		17
2021年WCDでのグローバルリーダーズメッセージ.....	浜島 信之	18
2021年ワールドキャンサーデーに参加して.....	梶村 春彦	19
World Cancer Day と小児がん		
アジア小児血液・がん治療研究グループ (APHOG) の発足.....	中川原 章	20
誰ひとり取り残さないがん医療を目指してワールドキャンサーデーが繋ぐもの.....	河原ノリエ	22
UICC 日本委員会.....		24



のライトが点灯し、幻想的な光景が映し出され、集まったメディア各社のカメラのフラッシュが瞬く中、がんという病への私たちの想いがひとつになる瞬間を分かち合うことができました。

ブルーとオレンジの光を背景に、ゲストの吉永小百合さんから力強いメッセージを頂戴し、世界がひとつになってがんという病気のことを思い、考える貴重な時間をもちました。まさに、2021年のワールドキャンサーデーは「Light Up the World」を通じて、日本各地を希望の光でつなぎ、がんに立ち向かう想いを共有することができたのです。

点灯式にご登壇いただいた方々

ゲスト

吉永 小百合 さん (映画俳優)

坂本 龍一 さん (音楽家)

…ビデオメッセージにてご出演

UICC日本委員会メンバー

野田 哲生 (UICC日本委員会委員長／
がん研究所所長)

中釜 齊 (UICC日本委員会幹事／
国立がん研究センター理事長)

[司会] 河原 ノリエ

(UICC日本委員会広報委員長／
東京大学特任講師)

ワールドキャンサーデー

ライトアップ点灯式、12のワールドキャンサーデーセッション、そして、グローバルリーダーたちのメッセージははこちらの動画でご覧いただけます。



また企画の段階からご多忙な各加盟組織の先生方に、かかわっていただき、ワールドキャンサーデーセッションとして「誰ひとり取り残さないがん医療」を目指して、がんを取り巻く様々な課題、がんはどう向き合うかを語り合い、新たに未来を切り拓く決意を示す機会をいただきました。がん医療に希望を持って立ち向かうため、医療環境に関わる「多角的」、「本質的」な情報と問題点の共有、環境整備が今後の重要な課題であると認識するとともに、自治体も含めた官民連携も視野に入れ、課題解決につながるような継続的で、発展的な仕組み作りを考え、メッセージを発信することの重要性を共有しました。

またグローバルリーダーズメッセージでは、UICCメンバーの先生方や、アジアの研究者たちから、そして、UHC国連大使・武見敬三参議院議員、IFMPA副会長・手代木功塩野義製薬社長にもご参加いただき、この活動が、グローバルな活動の地平に繋がっているということを確認し、この国際活動を繋げていかなければならないという決意を新たにいたしました。

今年はいまだに例のないコロナ禍という極めて過酷で困難な状況の中ではありますが、お陰様を持ちまして、ワールドキャンサーデーを行うことができました。これもひとえに皆様方のご支援とご協力の賜物と心より御礼申し上げます。また、当日はイベントスタッフやがん研職員をはじめ、多くの方々にお手伝い頂き、ありがとうございました。この場をお借りし、皆様方のご協力に御礼申し上げます。

I AM AND I WILL

私はいま そしてこれから私は

このメッセージキャンペーンに参加し、それぞれの立場から声をあげて、がんに立ち向かう決意が各地で表明されています。

厚生労働省には本年もご協力をいただき、国際課やがん疾病対策課とも連携し、田村憲久厚生労働大臣からもメッセージをいただきました。



全国から寄せられたライトアップシーン (一部)



【北海道】さっぽろテレビ塔



【新潟】新潟日報メディアシップビル



【東京】がん研究会



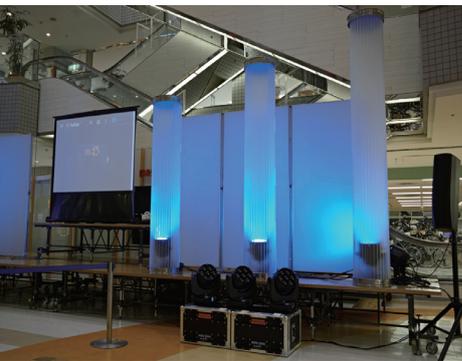
【富山】世界遺産相倉合掌造り集落



【東京】フジテレビ



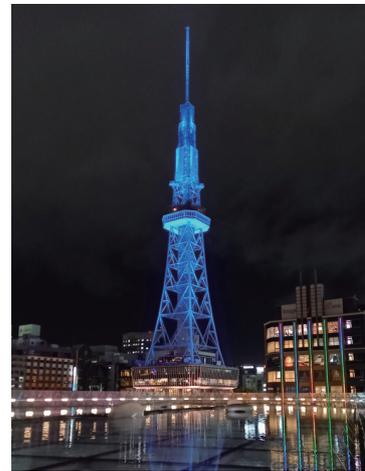
【東京】東京ビッグサイト



【岐阜】マーサ21 (岐阜大学)



【京都】京都タワー



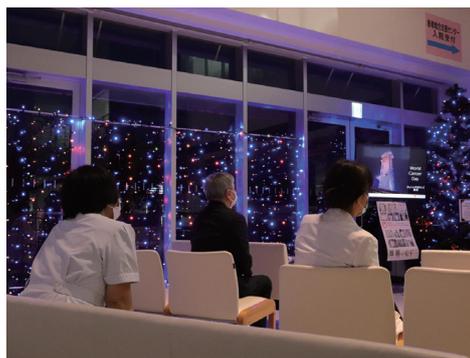
【愛知】名古屋テレビ塔



【神奈川】大船観音



【大阪】万博記念公園太陽の塔



【島根】松江赤十字病院



【三重】三重大学医学部付属病院

ワールドキャンサーデー

ライトアップ ザ ワールド オンライン開催 YouTubeにてライブ配信
<https://worldcancerday.jp/>

2021年2月4日(木) 17:30~18:20

ワールドキャンサーデーは世界中の人々が、がんのためにできることを考えて行動を起こす日です。UICC日本委員会ではオンラインで、ライトアップ点灯式とワールドキャンサーデー・セッションを加盟組織で共同開催いたします。

2月4日の夜空をブルーとオレンジの光に包むライトアップが、世界各地で行われます。コロナ禍で、人と人の距離を離さなければならぬいま、距離を超えて、日本各地の光を繋ぎ、未来にむけてがんという病への想いをひとつにする瞬間をともに分かち合ひましょう。

ライトアップ点灯式 I am and I will ー未来に光を繋ぐ

ゲスト: 吉永小百合(映画俳優)・坂本龍一(音楽家)



Photo by zakkubalan ©2020 Kab Inc.

日本各地のライトアップの点灯式をおこない日本国内のみならず世界にむけて、がん立ち向かう想いを発信します。



野田哲生
UICC日本委員会委員長
(がん研究会がん研究所所長)



中釜 斉
UICC日本委員会幹事
(国立がん研究センター理事長)



河原ノリエ
UICC日本委員会広報委員長
(東京大学特任講師)

ワールドキャンサーデー・セッション I am and I will ー「誰ひとり取り残さないがん医療を目指して」

人は皆、がんという病に立ち向かう力をもっています。コロナ禍でがん医療を巡る課題が社会の中で浮き彫りになりました。いまこそ、UICCのネットワークを繋げて「誰ひとり取り残さないがん医療」を目指して、がん和社会のありようを皆さんと共に考えたいと思います。ワールドキャンサーデー・セッションがライトアップのあとに、HPで1週間公開されます。(無料)



松江赤十字病院



万博記念公園太陽の塔



京都タワー



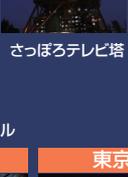
世界遺産相倉合掌集落



新潟日報メディアシップビル



仙台スカイキャンドル



さっぽろテレビ塔



博多ポートタワー



三重大学医学部付属病院



マーサ21



名古屋テレビ塔



大船観音



フジテレビ

日本対がん協会



東京ビッグサイト

がん研究会

主催 UICC日本委員会
www.jfcr.or.jp/UICC

協力 東映

ワールドキャンサーデー

2021年2月4日(木)

誰ひとり取り残さないがん医療をめざして

ライトアップ ザ ワールド

「I AM AND I WILL - 未来にひかりをつなぐ -」

吉永小百合さん、坂本龍一さんをゲストに迎え、ライトアップ点灯式をおこなわれました。
全国16の会場で、一斉にライトアップされました。

【北海道】 さっぽろテレビ塔
協力：東札幌病院、
ピンクリボン in SAPPORO

【宮城】 仙台スカイキャンドル
協力：宮城県立がんセンター

【東京】 東京ビッグサイト
協力：がん研究会

【東京】 フジテレビ
協力：がん研究会

【東京】 がん研究会
協力：がん研究会

【東京】 日本対がん協会ビル内
協力：日本対がん協会

【神奈川】 大船観音
協力：ピンクリボンかながわ、
大船観音寺

【新潟】 新潟日報メディアシップビル
協力：新潟県立がんセンター

【富山】 世界遺産相倉合掌造り集落
協力：アジアがんフォーラム、
がん研究振興財団

【岐阜】 マーサ21
協力：日本癌治療学会、
岐阜大学

【愛知】 名古屋テレビ塔
協力：愛知県がんセンター

【三重】 三重大学医学部附属病院
協力：三重大学

【京都】 京都タワー
協力：医療法人財団足立病院

【大阪】 万博記念公園太陽の塔
協力：大阪国際がんセンター、
日本癌治療学会

【島根】 松江赤十字病院 /
さんいん中央テレビ鉄塔
協力：日本乳癌学会

【福岡】 博多ポートタワー
協力：九州がんセンター

ライトアップ会場



UICCワールドキャンサーデー2021に参加して

岐阜大学医学部附属病院病理部 病理診断科 臨床教授・病理診断科長
宮崎龍彦

私たち岐阜大学は、吉田和弘附属病院長（UICC日本委員会幹事・日本癌治療学会国際委員会委員長）の号令のもと、チームとしては今回初めて2月4日のUICCワールドキャンサーデーに参加しました。地域社会への周知を意識し、当初、2月4日の点灯式セレモニーおよび2月6日～7日の市民公開セミナーを、マーサ21ショッピングセンターのイベント広場で開催すべく準備を進めました。コロナ感染拡大のため、やむなく市民公開セミナーは中止とし、ポスター掲示およびがん検診受診啓発の資料配付を行いました。私どもに与えられたテーマは「闘う」。地域医療の中にあつていかに癌と闘っているかをビデオにまとめ、

Youtubeで公開していただくとともに、その内容をポスターにもしたため、多くの市民の方に情報を届けることができました。ワールドキャンサーデーの点灯式においては、中継されるビデオに吉田院長が登場すると、会場内が沸き立ち、コロナで下を向いた心が大いに奮い立たせられました。ゲストの吉永小百合さん、坂本龍一さんの知名度はすさまじく、予告ポスターのお二人の名前を見た市民からマーサ21に多数の問合せが殺到したそうです。これからもUICCワールドキャンサーデーに積極的に関わっていきたいと思います。末筆ながら、全面協力いただいたマーサ21の皆様にご礼申し上げます。



ライトアップの瞬間 横断幕(20m)は手作り



当日配布したがん検診・がんゲノム啓発資料



吉田院長のビデオメッセージに会場沸立つ



吉田院長を囲んでがんセンターメンバーで

2021年ワールドキャンサーデーに参加して

(公財) 世界遺産相倉合掌造り集落保存財団

中島 仁司

私は(公財)世界遺産相倉合掌造り集落保存財団の中島仁司と申します。私たちは富山県にある世界遺産の相倉集落を維持・保全する活動を日々行っております。

最初に、ワールドキャンサーデーライトアップのお話を伺った時には、昨今のコロナ禍で数々のイベントが中止となり、人と人との交流が難しく心が疎遠になっていく中において、癌を患い不安感にさいなまれている人たち、癌を克服しようと頑張っている人たち、癌を乗り越えた経験を持っている人たち、そんな人と人との架け橋となり得る非常に良い取り組みであると感じました。

相倉集落としては、集落の入口にあり荘厳な外観を誇る合掌民宿「勇助」をライトアップする事に決め、来る日に向け準備に入りました。相倉集落は元々年5回程集落のライトアップイベントを行っていたのですが、今回に関してはライトアップのテーマも、照射するライトの色も異なるという事で、まずは絵コンテから入り、関係者数名で話し合い、推敲を重ね準備を進めていきました。結果的には、カラーフィルム付きLEDライトを8基使用し、建物の内からは暖かなオレンジ色で、外からは厳格な冬の寒さを思わせる青色で照らし、本番当日は雪のチラつく幻想的なコンディションの中、約1時間に渡りライトアップを行いました。その光が、今を懸命に生きている人々への希望の光として、一人でも多くの方の心にお届けすることができたなら幸いです。

更に、地元としては嬉しい学びの機会も得ることができました。相倉集落のすぐ近く、南砺市平若者センター春光荘では、地元の上平小学校放課後児童クラブの児童に、一般社団法人アジアがんフォーラム「リラの木のおいえ」の沖田孝夫さん・坂井彦就さん・宮窪大作さんや「おはなしポケット」の島田陽子さんによって癌の原因や発症の仕組み、予防方法などを富山弁で分かりやすく説明頂ける紙芝居の読み聞かせを開催頂き、多くの児童が集まり熱心に耳を傾けていました。また、がん研究振興財団からのわかりやすい資料と地元の日の出屋製菓さんからのお土産もいただいて帰ってきました。我が家の長女・次女(当時小学1・2年生)も拝聴し、帰宅後「面白かった!」と感想を聞かせてくれました。

私事ながら、実は私の母は2018年に咽頭癌が発覚し、抗がん剤と放射線治療を経て、現在は経過観測の3年目にあたります。母が元来吉永小百合さんのファンであったこともあり、今年春に母を連れて「いのちの停車場」を観に行き、ここでもまた命と向き合うこと・人間の尊厳について深く考えさせられ、上映後母と意見を交わすことができました。

今回この意義あるイベントに参加させて頂き、普段すぐ身近にあるはずなのにどこか直視出来ずにいる「命と向き合うという事」について、自分だけではなく周りの人たちと共に深く考え合うきっかけを頂けたこと、この場をお借りし御礼申し上げます。またこのイベントを通じて、地域が繋がる良い機会をいただき、未来への可能性を感じました。



がん対策の今と未来をつないだライトアップ

(公財) 日本対がん協会 常務理事

石田 一郎

2月4日18時、吉永小百合さんの掛け声に合わせて、日本対がん協会の会議室がブルーとオレンジに染まりました。PCを見ると同じ色にライトアップされた日本各地の建造物がモニターの中でひとつになっていました。

コロナ禍で、がんを取り巻く状況は大きく変化しました。新たな社会課題も発生しました。それぞれのセクターでがん征圧に取り組んでいる人たちの「I AM AND I WILL」が凝縮した映像に多くの協会職員が見入っていました。

コロナ禍でもがんは待ってくれません。UICCのワールドカンサーデー・セッションでは、垣添忠生日本対がん協会会長が「交わる：患者会活動～コロナの孤立・分断をどう乗り越えるか～」と「生きる：私はいま、そしてこれから私は」の二つのセッションの座長を務めました。前者のセッションでは、患者会がつながって、全体がお互いを支えあう場づくりの方法や、前向きな政策提言ができる患者会のあり方など、患者会の現在と未来について意見が交わされました。後者では、「在宅医療」をテーマにした映画「いのちの停車場」を素材に看取りや人間のウェルビーングに在宅医療がどう貢献するかをパネリストがそれぞれの経験をもとに語り合いました。おもわず涙ぐんでしまう場面もありました。

セッションのスクリーンショット



コロナ禍により、2020年のがん検診受診者数は3割減となりました。日本対がん協会では、全国の支部に緊急アンケートを依頼し、集計結果を逐次、対がん協会報やSNSで発信するなど、コロナ禍でのがん検診受診を訴求しました。多くのマスメディアが協会のデータを引用し、がん検診をスキップすることで進行がんが見つかる人が増える恐れがあることへの警鐘をなしました。これは現在進行形の社会課題です。

また、がん患者やご家族の悩みをうかがう「がん相談ホットライン」に寄せられる声からは、がん患者がコロナ禍で孤立・孤独を深めていることがわかったので、オンラインを駆使した患者の集い（がんサイバーカフェ）やアプリを使ってみんなで歩いてつながるリレー・フォー・ライフセルフウォークなどを実施しました。今できることを走りながら考えた一年を回想し、未来に向けた取り組みへの決意を新たにす、わたしたち協会職員にとっても「I AM AND I WILL」なひとときになりました。



協会内のライトアップ画像

ワールドキャンサーデー・セッション

がんを取り巻くさまざまな社会課題について、それぞれがその役割を通じてがんとう向き合うか、12のセッションで語り合い、「誰ひとり取り残さないがん医療」のために、未来を切り拓く決意が新たにされました。

1 交わる (Interacting)

がんを乗り越える力が交わっていく～患者会活動～コロナの孤立・分断をどう乗り越えるか～

Bringing together the power to overcome cancer

Patient group activities: How can we overcome isolation and fragmentation caused by COVID-19?

患者会は患者さんたちが孤立せず知識と力を得ることや、がんという病気の啓発に大きな役割を果たしています。しかしコロナ禍は患者会のあり方を大きく変え、その意義を改めて問い直していると言えます。本セッションでは患者会で活躍する患者さんと医療者に、コロナ禍での活動と課題、そしてコロナ後の世界で「誰ひとり取り残さないがん医療」を実現するための患者同士の繋がりについて話し合っていました。



垣添 忠生 (座長)
UICC日本委員会幹事・
日本対がん協会会長



麻倉 未稀
歌手・ピンクリボン
ふじさわ実行委員長



小島 康幸
日本乳癌学会・
聖マリアンナ医科大学
乳腺・内分泌外科准教授



土井 卓子
湘南記念病院
乳がんセンター長・
ピンクリボンかながわ
代表



吉田 久美子
宮城県立がんセンター・
サロネットワークみやぎ
代表

2 防ぐ (Preventing)

がんは予防できるのか? ①～どこまで予防についてわかっているのか?これから研究はどう進むのか?～

Can we prevent cancer? (1) How much do we know about cancer prevention?

How will research advance in the future?

がんを予防することは我々人類共通の願いです。最近の研究から、がんの発生には生活習慣などの環境要因と、持って生まれた体質などの遺伝要因が複雑に絡み合っていることがわかってきました。それらを踏まえて今現在がんの予防がどのくらいできるのか、今後どのような課題が出てくるかなどを、UICC-Japanで最もがんの疫学に力を入れている愛知県がんセンターのチームが最新の研究動向を交えてわかりやすく解説しました。



高橋 隆
愛知県がんセンター総長



伊藤 秀美
愛知県がんセンター研究所
がん情報・対策研究分野
分野長



井本 逸勢 (座長)
愛知県がんセンター研究所
分子遺伝学分野分野長



松尾 恵太郎
愛知県がんセンター
がん予防研究分野分野長

3 防ぐ (Preventing)

がんは予防できるのか? ~女性のがん予防

Can we prevent cancer? (2) Preventing women's cancer

乳がんや婦人科腫瘍などの女性のがんは近年UICCの重点課題となっています。「誰ひとり取り残さないがん医療」の実現のためには、構造的な不平等に晒されやすい女性たちを積極的にケアする必要があるためです。本セッションではこれら女性のがんの予防について、行動変容による一次予防や、検診による二次予防、そして最近その有用性から推奨されるようになった遺伝性のがんへの予防的な対処などを、医療現場の専門家が解説しました。



藤 也寸志 (座長)
九州がんセンター院長



田村 恵美子
新潟県立がんセンター
看護副部長・
乳がん看護認定看護師



藤井 多久磨
日本婦人科腫瘍学会・
藤田医科大学産婦人科教授



町田 洋一
日本乳癌学会・
医療法人鉄焦会
亀田総合病院放射線科部長



三冨 亜希
新潟県立がんセンター
乳がん看護認定看護師

4 考える (Thinking)

みんなで考えよう① ~AYA世代のがん~

Thinking about issues together (1) AYA generation cancer

15歳~39歳までの思春期・若年成人 (Adolescent and Young Adult) を指す「AYA世代」のがん患者さんは、仲間や情報が少ないこと、妊孕性、家族やパートナーとの関係、仕事や学業との両立、外見の変化など多くの悩みを抱えていることが知られています。本セッションでは25歳で乳がんを公表し発信を続けている元SKE48の矢方美紀さんのご経験や、医療現場の実践を踏まえ、社会全体でAYA世代のがん患者さんを支えるにはどうしたらよいかを議論しました。



大野 真司 (座長)
UICC日本委員会幹事・
がん研究会有明病院副院長・
乳腺センター長



澤田 守男
医療法人財団足立病院 院長



田部 宏
日本婦人科腫瘍学会・
国立がん研究センター
東病院婦人科科長



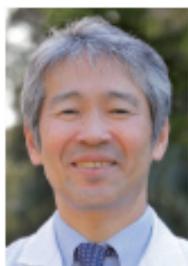
矢方 美紀
声優・タレント

5 考える (Thinking)

みんなで考えよう② ~がんと発達障害~

Thinking about issues together (2) Cancer and developmental disorders

UICCが掲げる「誰ひとり取り残さないがん医療」は様々な障害のある方々も例外なく取り残さないことを目指します。本セッションは、障害特性に配慮したがん医療の実現を目的に、医療側、障害当事者側、そして俯瞰的な視点から、発達障害を抱える患者さんの希望・理解度・社会的状態を確認する体制をいかにして構築するかを考えました。



清水 研 (座長)
がん研有明病院
腫瘍精神科部長



井上 真一郎
岡山大学病院
精神科神経科助教



水流 聡子
東京大学大学院
工学研究科特任教授



中邑 賢龍
東京大学先端科学技術セン
ター人間支援工学分野教授

6 学ぶ (Learning)

がんを地域で学ぶ ～生涯教育としてのがん教育～

Learning about cancer in the community Cancer education as lifelong learning

がんについて知ることはがん予防や早期発見、治療や、身近ながん患者さんを支えるために必要不可欠です。がん教育はがん対策推進基本計画で重要な項目とされ、全国で行われ始めています。本セッションでは学校現場や地域でのがん教育をテーマに「誰ひとり取り残さないがん医療」の実現のため、またがんについての誤ったイメージやがん患者さんへの偏見の払拭のためにどのようながん教育が必要であるかを議論しました。



田島 和雄 (座長)

UICC日本委員会名誉会員・アジアがんフォーラム
三重大学客員教授
美杉クリニック院長



加瀬 郁子



黒崎 亮

日本婦人科腫瘍学会
埼玉医科大学国際医療
センター婦人科腫瘍科講師



中瀬 一則

三重大学がんセンター
センター長



横嶋 剛

文部科学省 初等中等教育局
健康教育・食育課
健康教育調査官

7 闘う (Fighting)

コロナ禍のがん医療① ～大阪の底力～

Cancer care during the COVID-19 pandemic ① The latent power of Osaka

コロナ禍では医療と行政の連携の重要性が改めて明らかになりました。そこで本セッションはがん診療連携拠点病院と自治体が、地域という枠組みでどのように連携してこの一年のがん医療を乗り切ってきたのかを振り返り、見出された課題について議論しました。大阪国際がんセンターと大阪府健康医療部健康推進室からの報告、地域が一丸となって闘い抜いた「大阪の底力」です。



松浦 成昭 (座長)

大阪国際がんセンター総長



池山 晴人

大阪国際がんセンター
がん相談支援センター
センター長



岩田 知子

大阪府健康医療部
健康推進室
健康づくり課 生活習慣病・
がん対策グループ



中谷 健志

大阪府健康医療部
健康推進室
健康づくり課課長



宮代 勲

大阪国際がんセンター
がん対策センター所長

8 闘う (Fighting)

コロナ禍のがん医療② ～コロナ禍をがん医療はどう乗り切るのか～

Cancer care during COVID-19 pandemic ② How can cancer care overcome the challenges of the pandemic?

コロナ禍がもたらした問題には、新規にもたらされたもののように、一つ一つを見るとわが国のがん医療が抱える既存の問題点が改めて可視化されたものも混在しています。本セッションでは病院から学会、行政、アジア比較とミクロからマクロに至る各レベルから、今何が起きているかそして今後どうすべきかを話し合い、コロナ禍が我々に突き付けた課題とその解決法を模索することで、未来のがん医療への道を拓くことを目指します。



土岐 祐一郎 (座長)
大阪大学医学部
付属病院院長



岩佐 景一郎
厚生労働省がん疾病対策課
がん対策推進官



大西 洋
日本放射線腫瘍学会・
山梨大学医学部
放射線医学講座教授



佐野 武
がん研究会
有明病院院長



松田 智大
国立がん研究センター
がん対策情報センター
がん登録センター全国がん登
録室長

9 闘う (Fighting)

コロナ禍のがん医療③ ～岐阜のこの1年を振り返って～

Cancer care during COVID-19 pandemic ③ Looking back on the past year in Gifu

新型コロナウイルスの流行は医療現場に大きな衝撃をもたらしました。がん医療として例外ではなく現在進行形で闘いが続いております。本セッションは岐阜大学医学部附属病院を舞台に医師、看護師、薬剤師と各医療職を横断し、診療科をまたぎ、総力を挙げて新型コロナウイルスと闘いながらがんを闘い抜いたこの一年間のドキュメントです。現場からの生の報告です。



吉田 和弘 (座長)
UICC日本委員会幹事・
岐阜大学医学部附属病院
病院長



大野 廉
岐阜大学医学部附属病院
呼吸器内科学臨床教授



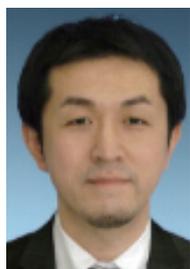
苅谷 三月
岐阜大学医学部附属病院
看護部長緩和ケアセンター
GM・がん看護専門看護師



鈴木 昭夫
岐阜大学医学部附属病院
薬剤部薬剤部長



二村 学
岐阜大学医学部附属病院
がんセンター副センター長・
乳腺外科長



牧山 昭資
岐阜大学医学部附属病院
がんセンター副センター長



宮崎 龍彦
岐阜大学医学部附属病院
病理部臨床教授・
病理診断科長



森重 健一郎
岐阜大学医学部附属病院
がんセンター長・
産婦人科教授

10 支える (Supporting)

がん在宅医療を支える ～病院から地域・住み慣れた家へ～

Supporting home-based cancer care

From hospitals to homes and communities that are familiar to people

かつてがんの在宅医療といえば、治療を終了した患者さんの看取りの場というイメージがありました。しかしがん医療の急速な進歩に伴い、治療と並行して行う「治し支える」在宅医療へと進化しつつあります。本セッションでは患者さんを生活者として支えながら治療を行う在宅医療のあり方について各分野の専門家が解説し、入院、通院、在宅という流れの継続性や、地域とコミュニティでいかにして患者さんを支えてゆくかを議論しました。



石谷 邦彦 (座長)
東札幌病院理事長



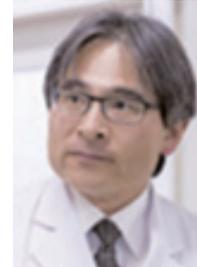
大井 賢一
認定NPO法人がんサポート
コミュニティー事務局長、
日本臨床死生学会常任理事



大串 祐美子
東札幌病院
副院長・看護部長



辻 哲夫
元厚生省事務次官、
東京大学特任教授、
日本在宅ケアアライアンス
特別顧問



三宅 智
東京医科歯科大学
がん先端治療部長、
臨床腫瘍学分野教授
特別顧問

11 生きる (Living)

私はいま そして これから私は

I am and I will

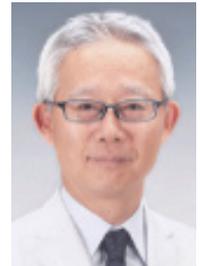
本年のライトアップ点灯式ゲストの映画俳優・吉永小百合さん主演の在宅医療がテーマである映画「いのちの停車場」が5月に公開されます。本セッションではこの作品を撮られた成島出監督に在宅医療への想いや、ご家族を家で看取れなかった後悔、尊厳ある生と死とは何かという葛藤、そして不思議な巡りあわせと映画仲間を支えられてご自身の小細胞肺癌を克服されたお話などを、在宅医療・がん医療の専門家を交えて語っていただきました。



垣添 忠生 (座長)
UICC日本委員会幹事・
日本対がん協会会長



成島 出
映画監督



堀江 重郎
日本癌治療学会、
順天堂大学医学部
泌尿器科学講座教授

12 食べる (Eating)

がんと食・栄養

Cancer and food and nutrition

私たちの体は食べ物で作られており、体調や疾患は食と直接結びついていると言えます。本セッションでは、科学的根拠に基づいたがんを防ぐ食事や、多くのがん患者さんを悩ませる治療中の味覚変化(味を感じる能力の低下や苦み、金属を舐めるような味がするようになるなど)を乗り切る工夫、そしてがんの再発を予防する食生活などを、わが国の食をめぐる状況やがんサバイバーの視点を交えながら解説しました。



佐谷 秀行 (座長)
日本癌学会理事長、
慶應義塾大学医学部
先端医科学研究所教授



中村 丁次
日本栄養士会会長・
神奈川県立保健福祉大学
学長



服部 幸應
服部栄養専門学校
校長・理事長

World Cancer Dayを終えて

東札幌病院
石谷 邦彦

2000年2月4日World Summit Against Cancer for the New Milleniumがその理念をパリ憲章として採択し、それを記念して2月4日がWorld Cancer Dayと定められた。UICCは2005年からWorld Cancer DayにWHOなどの国際組織の支援を受けながら世界的なキャンペーンを行なってきた。UICC日本委員会も同様に活動して来たが、今年は激しく進化した様相であった。一つは16都道府県に渡るlight up the worldに俳優吉永小百合さん、音楽家坂本龍一さんを交えたillumination lightsとtalk sessionである。なんとも煌びやかなひと時であった。今一つは12のcatch copyに基づく学際的なtalk sessionである。私もその一つ「支える、supporting: がん在宅医療を支える」の司会の大役を果たしたが、吉永小百合さんがこのeventに登場した訳は、近々放映される映画「いのちの停車場」で彼女が在宅医療に身を投じる女医を演じるからであった。そのテーマは“たとえ病気を患っても残された人生をその人らしく生きるを支える”であろうか。最近のUICCの活動を見るにつけ、細胞病理学の祖、かつがんの刺激説を唱えたルドルフ・ウイルヒョウ(Rudolf

Virchow)博士の軌跡を思い起こさずにはいられない。彼は1848年26歳時チフス大流行の調査のためドイツ、プロイセン王国から現在のポーランド領オーバーシュレジエン地方に派遣され、その死者は富める者ではなく貧しい者達であることを報告し、公衆衛生学を説き「医学とは一つの社会科学であり、さらに政治は広義の医学に他ならない」と述べている。以来医学者として多くの業績と地位をなしたが、同時に宰相オットー・ビスマルク(Otto Bismarck)の政敵としても活躍した。(市野川容孝。「社会科学」としての医学、思想、2001、6、2002、7) 山際勝三郎先生がウイルヒョウ博士のもとで学び人工がん発生の偉業を成し遂げたことは言うに及ばない。UICC日本委員会はその流れを汲み吉田富三先生、菅野晴夫先生が1966年に東京で第9回UICC Cancer Congressを開催している。つまり学際的な研究とともに、ウイルヒョウ博士の示唆した社会科学の活動の一端が今年のUICC日本委員会のWorld Cancer Dayの活動であったと言うのは我田引水であろうか。

(この小文が今のCOVID-19 pandemicに参考に
なれば幸いである)

The 3rd & 4th Joint Conference
Sapporo Conference for Palliative and Supportive Care in Cancer

第3回・第4回合同開催
がん緩和ケアに関する
国際会議 完全同時通訳

2022. **7.21** Thu. - **22** Fri. - **23** Sat.

事前参加登録締切
2022年5月31日(火)

一般演壇募集締切
2021年11月30日(火)

<http://www.sapporoconference.com>

会場 札幌パークホテル
札幌市中央区南10条西3丁目

昼席 25,000円 | 事前登録 | 35,000円 (8日参加)

夜席 15,000円 | 事前登録 | 20,000円 (8日参加)

ワークショップ参加費 10,000円 ※参加者数に依ります。

本会年会費 700名

ワークショップ定員 40名

※定員にのみ参加、超過分はキャンセルさせていただきます。

第3回大会長 照井 健 (札幌市東区東札幌病院) 第4回大会長 三宅 智 (東京医科大学大学院)

主催 医療法人東札幌病院

The 3rd & 4th Joint Conference: Sapporo Conference for Palliative and Supportive Care in Cancer
【第3回・第4回合同開催】 がん緩和ケアに関する国際会議【プログラム】

第1日目

シンポジウム1
7.21 Thu.
08:00-12:00

オピオイドとがんの痛み: 進化するその科学と実践
 主 賓: Russell Portenoy (MHS Hospice and Palliative Care, USA)
 副議長: 山際勝三郎 (東京医科大学)
 副議長: 下山 謙人 (千葉大学)

基調講演 "臨床における緩和" 腫瘍の臨床を通して、利益を最大に損益を最小に
 Russell Portenoy (MHS Hospice and Palliative Care, USA)

序 辞
 Russell Portenoy (MHS Hospice and Palliative Care, USA)

第2日目

シンポジウム2
7.22 Fri.
08:00-12:00

なぜ緩和ケアにスピリチュアル・ケアを組み込むことが必要なのか
 主 賓: Christina Puchalski (George Washington University, USA)
 副議長: Beth 徳島

基調講演

緩和ケアに
 Betty Ferré
 スピリチュアル
 Karen Stok
 (Duke University)
 スピリチュアル
 Anne Vand
 実存のない
 進行性肺癌
 スリリチュアル
 Marvin Om

シンポジウムセミナー2
7.22 Fri.
13:00-17:00

医学、そして
 Sheldon Si
 議長: 三宅 智

プレナリーセッション2
7.21 Thu.
17:00-18:00

緩和ケア
 Friedrich S
 議長: 中村 健

実存の脅威
 Peter Salm
 議長: 大島 秀

実存の不安
 Sarah Dava
 議長: 清水 敏

第3日目

プレナリーセッション3
7.23 Sat.
07:00-12:00

情報と伝達の技術が導入される緩和ケア (Technology-enabled palliative care) の現状
 主 賓: David Hull (University of Texas MD Anderson Cancer Center, USA)
 序 辞
 David Hull (University of Texas MD Anderson Cancer Center, USA)
 第四次産業革命とヘルスケア、特にCOVID-19パンデミック後のメタカルデジタルトランスフォーメーションの発展
 徳島 彰 (マイクログラフ デイブロッグシステム株式会社)
 ヘルスケアプラットフォームにおけるインテリジェンスの強化
 マイクロソフトの発展
 遠隔医療、人工知能、デジタル治療など、これはゲーム
 "ライスオアザロスト"か、それとも"心のこもったケアの未来"か
 Milar M. Klamdar (Massachusetts General Hospital, USA)
 COVID-19パンデミックにおける電子患者報告プラットフォームの実践
 Augustus Charnant (Foundations IRCCS National Cancer Institute, Chair of EAPC Research Technology-enabled palliative care of the oncology research)
 René J. Jox (Luxanne University Hospital, Switzerland)

シンポジウムセミナー3
7.23 Sat.
12:00-13:00

新しいサポーティブ・オンコロジー分野の開拓
 Declan Walsh
 (Levine Cancer Institute, Editor-in-Chief of BMJ Supportive and Palliative Care)
 議長: 高山正彦 (東札幌病院)

ワールドキャンサーデーによせて

医療法人財団 足立病院
院長 澤田 守男

「誰ひとり取り残さないがん医療を目指して」というテーマで、UICC日本委員会からのお誘いいただき、①京都タワー・ライトアップ、②WEB対談「みんなで考えよう～AYA世代のがん」に参加させていただきました。ブルーに染まった京都タワーをご覧になった方々が、がん医療に想いを馳せていただいていたなら嬉しい限りです。

「女性の一生をサポートする」という、私ども足立病院の方針から、女性特有のがん、そして妊孕性温存治療という問題に対しては、我々グループをあげて積極的に取り組んでいきたいと考えております。

まず、子宮頸がん予防に関しては、我が国は世界に比して大きな後れをとっています。HPVワクチン接種の積極的勧奨が一時中止となって約8年経過しました。昨年、WHOが子宮頸がんの制圧に乗り出し、いよいよ世界では子宮頸がんの撲滅が視野に入ってきています。本来、子宮頸がんを苦しむことのなかった女性、我が国にはどれだけいるでしょうか？情報や機会を与えないまま、時間がいたずらに時間が経過してしまっているのが現状です。対象となるAYA世代の女性に、HPVワクチン接種を選択できる権利を与えることが急務だと思います。

また、AYA世代がん患者における妊孕性温存という問題、大きく取り上げられるようになってきました。生命にかかわる病なので、根治性を損なうことがあってはなりません、がん患者さんのQOLを維持することも欠かせない視点です。受精卵や卵子・精子の凍結保存、卵巣組織凍結が実用化され、選択肢はひろがりを見せています。がん治療と同時に始まる妊孕性温存、ぜひ知っておいていただきたいです！

日本では一生涯のうち、2人に1人ががんに罹患し、3人に1人ががんでなくなる時代。「もし自分が、あるいは、家族が、友人が、がんに罹ったら?」、そんな想いを巡らせるには良い機会なのかもしれません。がん患者さんを社会全体でサポートするような、優しい未来をつくっていききたいですね！



グローバルリーダーズメッセージ

アジア地域のがん医療におけるUHC (ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ) の実現にむけた政策提言活動をおこなってきたグローバルリーダーたちからメッセージをいただきました。



Keizo Takemi

WHO Goodwill Ambassador for Universal Health Coverage Member of the House of Councilors



Isao Teshirogi

President, The Federation of Pharmaceutical Manufacturers' Association of Japan Vice President The International Federation of Pharmaceutical Manufacturers & Associations
President and Chief Executive Officer, Shionogi & Co., Ltd.



Akira Nakagawahara

Chairman of Saga International Heavy Ion Cancer Treatment Foundation



Haruhiko Sugimura

Vice President and Professor, Hamamatsu University School of Medicine
Director of Asia Cancer Forum



Nobuyuki Hamajima

Prof. of Department of Healthcare Administration Nagoya University Graduate School of Medicine



Professor Maqsood Siddiqi, Ph.D

Chairman, Cancer Foundation of India, Kolkata, India & President, Asia Pacific Organisation for Cancer Prevention



Yu Mon Saw, MHS, PhD

Associate Professor Nagoya University Asian Satellite Campuses Institute, Nagoya, Japan



Dr. Bounfeng Phoummalaysith, MSc, MMA, PhD

Vice Minister of Health, Lao PDR

2021年WCDでのグローバルリーダーズメッセージ

UICC 日本委員会 予防・疫学領域担当幹事
名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院特任教授

浜島信之

2021年のワールドキャンサードーでは、新たな試みとしてグローバルリーダーズメッセージが掲載された。そこで、8人のグローバルリーダーがメッセージを発信した。

武見敬三氏（WHOのユニバーサルヘルスカバレッジ親善大使、参議院議員）は、今後アジアでも高齢者が増加し、がん患者も増加していくことから、国境を越えてがんの診断治療提供ができる準備しておくことが重要であることを指摘した。

手代木功氏（日本製薬団体連合会会長、The International Federation of Pharmaceutical Manufacturers & Associations副会長、塩野義製薬会長）は、がん患者の痛みに対して薬剤が貢献してきたこと説明し、アジアの国々でユニバーサルヘルスカバレッジが進み、すべての人に治療薬が使用できるようになることを願っていると述べた。

中川原章氏（佐賀国際重粒子線がん治療財団理事長）は、アジアには25万人もの小児がんの患者さんがいること、日本では10人中8人の小児がんが助かるのに、アジアでは10人中1人か2人しか助かっていないことを指摘し、アジアの小児がんの子供たちを一人も取り残さずに救う活動を行おうと呼びかけた。

梶村晴彦氏（浜松医科大学教授副学長、アジアがんフォーラム）は、マレーシアやルワンダで分子疫学、地理病理学の共同研究を展開している。がんの診断には病理診断が必要であることから、遠隔医療システム構築をしながら、がん医療に寄与したいと述べた。

私、浜島信之（名古屋大学医療行政学教授）は、担当する文部科学省奨学金のヤングリーダーズプログラムというアジアの医療行政官を対象とした修士コースを紹介し、今後もアジアでのがん予防に貢献する決意を示した。

Maqsood Siddiqi氏（Chairman, Cancer Foundation of India, President, Asia Pacific Organisation for Cancer Prevention）は、HPVワクチン、子宮頸がんスクリーニング、乳がんリスクの低減と早期発見、子宮頸がんと乳がんの診療を強調した。

Yu Mon Saw氏（名古屋大学医療行政学准教授）はミャンマーから来た研究者で、青年期にある人のがんに対する意識を高める努力をすると述べた。

Bounfeng Phoummalaysith氏（ラオス保健省副大臣）はラオスにおいても、がんは増加してきているが、医療資源は限られていること、2017年にがんセンターができたが機器は十分でないこと、がんの医療費は高く患者にとって大きな負担であり、ユニバーサルヘルスカバレッジが必要であることを強調した。UICC Japanには医療スタッフの技術向上、がん予防、スクリーニング、緩和医療などへの支援をお願いがあった。

アジアには、シンガポール、マレーシア、タイのような日本と同じ程度の国力を有する国と、ラオス、カンボジア、ミャンマーのように発展途上にある国が混在する。前者はインフラのレベルが日本と同じもしくは近いことから、日本の技術がある程度活用可能である。一方、後者ではインフラのレベルが違うため、日本の技術が利用できないことが多い。安定した電圧が得られない地域ではX線撮影装置は使用できないし、病理診断医がいない地域での細胞診、組織診は意味を持たない。そのような地域への支援は、その地域のインフラ把握から始めなければならない。アジアに位置する日本にとって、世界のがん対策支援とは、アジアでのがん対策支援が中心となる。より多くの人たちが支援に加わってくることを期待する。



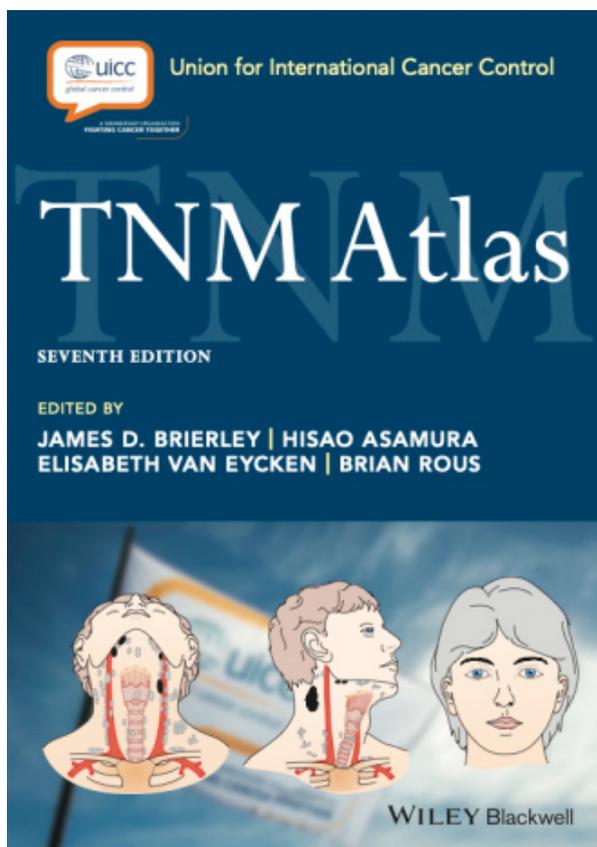
Advancing the cause of UHC in Asia

The University of Tokyo published in the May edition of the Japanese Journal of Clinical Oncology a collection of articles based on the lecture series “Is UHC for cancer in Asia an achievable goal?(link is external)” (Guest Editors: Hideyuki Akaza and Norie Kawahara).

In his Forward, Dr Tetsuo Noda, Chairman of the Japan National Committee for UICC and Director of the Cancer Institute at the Japanese Foundation for Cancer Research, writes:

“In order to raise the level of cancer treatment in Asia, we must not only concentrate on the medical characteristics of the disease, but also adopt a more macro perspective that takes into account the social determinants of cancer in Asia, including social structures, culture and economy.”

Dr Noda further writes that UHC for cancer is an urgent issue, with many Asian countries facing the challenge of ageing populations. These lectures highlight the fact that to achieve UHC for cancer, human resources from a wide range of fields – governments, medical institutions and private sector stakeholders – must combine efforts and find solutions to multiple issues from prevention to treatment.



TNM Atlas, 7th edition

The TNM Atlas, 7th Edition, a companion for the TNM Classification, is designed as an aid for the practical application of the TNM classification system by illustrating the T and N categories in clear and easily understandable graphics.

The aim of such a presentation is twofold: to enable all disciplines involved to reach a more standardized understanding and documentation of the anatomic spread of tumours, and to further enhance the dissemination and use of the TNM classification. The 7th edition of the TNM Atlas was released in June 2021.

World Cancer Day と小児がん アジア小児血液・がん治療研究グループ (APHOG) の発足

UICC日本委員会・小児がん委員会委員長
(アジア小児血液・がん治療研究グループ; APHOG 初代会長)

中川原 章

今年のWorld Cancer Day (WCD)も、華やかなライトアップと、吉永小百合さん、坂本竜一氏の参加による重厚な雰囲気、コロナ禍にも関わらず、大変盛り上がりました。また、その中に小児がんのグローバルな課題も取り上げていただき、深く感謝申し上げます。

そこで、小児がんのアジアにおける最近の展開について、ご報告したいと思います。

小児がんのグローバルな課題

2018年9月、世界保健機関 (WHO) と国際小児がん学会 (SIOP) 合同の「小児がんをglobal health agendaに」という提案が国際連合 (UN) で採択され、「2030年までに、世界の小児がんの治癒率を60%以上に上げる。」という目標が定められました (WHO Global Initiative for Childhood Cancer; WHO GICC)。そして、その公表が、2ヶ月後に京都で開催された第50回国際小児がん学会 (SIOP 2018 Kyoto) で行われたことは、前号のUICC日本委員会ニュースでご報告しました。

これを受けて、国際的科学誌に世界の小児がんの統計データが次々発表されましたが、Lancet誌およびScience誌によりますと、世界の小児がん (19歳以下) 発生数の推計は、年間約47万人、人口の約6割を占めるアジアでは約25万人と公表されました。しかも、高所得国では約80%が治るのに、全体の90%近くを占める低・中間所得国においては、0~30%しか助かっていません。これは、医療機関まで辿り着かない、診断できない、間違った診断、そのための間違った治療、治療費が払えない、治療の放棄、等が原因となっています。

そこで、WHOはSIOPおよび米国のSt. Jude Hospital等と連携し、最も支援しなければならない国を指定し、集中的に啓発活動を行うtarget countries方式を始めました。アジアでは、ミャンマー、フィリピン、マレーシアなどがその対象国になっています。しかし、新型コロナウイルス感染拡大により、その活動は思うように行っていないのが現状です。

一方、私たちアジアの小児がん治療研究グループの仲間は、アジア小児がん学会 (SIOP Asia) と連動し

たアクション・チームとして、「アジア小児血液・がん治療研究グループ (Asian Pediatric Hematology and Oncology Group; APHOG)」の設立にチャレンジして来ました。2012年4月、インドネシア・ジョグジャカルタで開催されたSIOP Asia 2012学会の際に最初の会合を開き、その後苦節9年を経て、ようやく今年3月に正式発足しました。

昨年のUICC日本委員会総会において、NPO法人小児がん・まごころ機構 (MOCC) が事務局となり、APHOGの設立及び資金集めとWHO GICC推進の活動を行うことに対し、ご支援いただくことをご承認いただきまして、深く感謝申し上げます。



2012年4月24日 第1回 APHOGG 有志会議 (インドネシア・ジョグジャカルタ)



2021年3月11日 第1回APHOG Executive Council会議 (Online)

APHOGのコア組織

APHOGは、端的に言って、米国の小児がん治療研究グループであるChildren's Oncology Group (COG) のアジア版と言っても過言ではありません。日本の小児がん研究グループ (Japan Children's Cancer Group; JCCG) も同じ機能を持ったグループです。しかし、その

規模は世界最大となります。現在、その組織骨格を形成中ですが、Executive CouncilとAdvisory Boardのコアメンバーが確定しました。

Executive Council:

Chairman; Akira Nakagawara (Japan)
 Secretary; Godfrey Chan (Hong Kong)
 Treasurer; Purna Kurkure (India)
 Bharat Agarwal (India), Chi-Kong Li (Hong Kong), Rashmi Dalvi (India), Hiroki Hori (Japan), Saghir Khan (Pakistan) and Alice Yu (Taiwan)

Advisory Board:

Soichi Adachi, JCCG (Japan Children's Cancer Group)
 Keon Hee Yoo, KPHOG (Korean Pediatric Hematology Oncology Group)
 Yongmin Tang, CCCG (Chinese Children Cancer Group)
 Shirpad Banavali, InPOG (Indian Pediatric Oncology Group)
 Panya Seksarn, ThaiPOG (Thai Pediatric Oncology Group)
 Bow Wen Chen, T-POG (Taiwan Pediatric Oncology Group)
 Yoshiyuki Takahashi (Japan), Kimikazu Matsumoto (Japan), Huanmin Wang (China), Xiaojuan Yuan (China), Amita Trehan (India), Ramandeep Arora (India), Svetlana Varfolomeeva (Russia)

実際の活動は、APHOG (治療研究グループ) と SIOP Asia (学会) が「車の両輪」となり、アジアの小児がんの治癒率向上及び治療後の長期ケアを実践することになります。また、アジアにおけるWHO GICCの目標達成を、主体的に実行する任務も負います。

今後の2年間で、アジア52カ国にロシア圏を含めた約60カ国の参加を目指し、他の大陸における小児がん研究グループとの連携を深めていきます。

WHO GICC の啓発・推進活動

1. 「ICCD 国際小児がんデー」啓発イベント開催 (佐賀市; 2021.2.14)
2. 第13回アジア小児がん学会 (Mumbai; Online Meeting) (2021.3.19-21)
 Symposium: “Asian Cooperative Groups for Childhood Cancer”
 “Asian Pediatric Hematology and Oncology Group (APHOG)
 ~ The Roadmap for the Future ~” A. Nakagawara, MD, PhD
3. 「WHO GICC in Tokyo 2021」 (Gold September Campaign) (東京; Online Meeting) (予定: 2021.9.25)
4. 「1st APHOG and SIOP Asia Joint Launch Online Meeting」 (予定: 2021.10.27)
 (“GotoMeeting” Platform sponsored by SIOP)

誰ひとり取り残さないがん医療を目指して ワールドキャンサーデーが繋ぐもの

UICC日本委員会広報委員長
東京大学東洋文化研究所特任准教授
河原 ノリエ

2021年のワールドキャンサーデーは、COVID-19によって、出口のみえない暗闇の中で迎えることとなった。毎年2月4日は、ブルーとオレンジのUICCカラーに世界中の夜空がともされるが、東の端の日本は、世界で一番早く、光がともされる。この未曾有の事態で暗闇にあるなか、人びとの心に光をともし、全国のひとびとの心を繋いでくださる方としては、どなたにお願いすべきだろうか、正直なところ、広報として思案にくれていた。

2006年から私はUICCのお手伝いをさせていただいている。北川知行先生のご紹介で、吉田富三先生のご長男吉田直哉さんに、なんと広報として教を乞うたことがある。「縦ノ木は残った」「国境のない伝記」など吉永さん出演の名作も手掛けられていらしたので、「いつの日かUICCのシンポジウムに吉永さんにいらしていただいて、UICC活動を皆さんに伝えたいと思う」と気宇壮大なことを吉田直哉さんに言ったことがあった。昨年、そんなことをふと思い出し、思い切って長い、長いUICCについての想いをしたためて、お願いをしてみた。吉永さんからご快諾を頂いた。緊急事態宣言下で、人と人の距離をはなさなければならぬ東京で、点灯式を行うことはかなりの困難が予想されたが、吉永さんがUICCにご協力なさるのであればと、東映にもご協力をいただいた。こうして丸の内東映を全館貸し切りにして、スクリーンに、全国16か所をうつして、吉永小百合さんによるライトアップ点灯式「未来に光をつなぐ」をWEB配信することができたのである。

国民的女優である吉永さんは、多くのがん患者の役を演じた名作を残されているが、はじめて医者役を演じられ、がん患者のいのちと向き合う映画「いのちの停車場」に出演されているときでもあり、がんというこの病に、深く想いを重ねてくださった。この作品は在宅医療におけるいのちとギリギリ向き合う作品であり、監督は日本を代表する成島出氏だが、彼自身もがんのサバイバーであり、今回、ワールドキャンサーデーセッションにおいても自身のI AM and WILLを語ってくださった。セレモニーでは、音楽家坂本龍一氏からのビデオメッセージもながされ、特に小児がんへの啓発を訴えられ

た。全国16か所のライトアップ会場は、UICC加盟組織が地元で人々が長年にわたって見上げて愛してきた場所を選んだ。加盟組織の方がたの事前の入念な準備の賜物で実現し、UICC活動は、こうした地域をもつ加盟組織によって支えられていたことをあらためて深く知ることとなった。

ライトアップの点灯式の後、ワールドキャンサーデーセッションをWEBで流した。

昨年夏から、このセッション企画はスタートし、関連学会や加盟組織がUICCメンバーとして、このセッションを創り出してくださった。ある方がおっしゃった。「ワールドキャンサーデーは、専門家たちが、自らの所属組織が共有するUICC理念の学習装置ですね。」と。

UICC JAPANは、UICC-AROとともに、「誰ひとり取り残さないがん医療」UHC研究を官民連携で続けてきており、東京大学においてがんを社会課題とする講義を10年つづけており、今回はその講師陣にもかかわってもらった。

グローバルリーダーズメッセージでは、UICCのメンバーのみならず、官民会議を支えてくださっているUHC国連大使・武見敬三参議院議員や、IFPMA副会長・手代木功塩野義製薬社長にも参加いただいた。今回のコロナ禍で、この「誰ひとり取り残さないがん医療」の実現が、途上国の問題だけではなく、日本においても大きな課題であることを私たちは学んだ。

ワールドキャンサーデーの3年間のテーマ「I am and I will」は、ひとりひとりが自分の人生のなかで生きている役回りのなかで、がんという病と向き合う決意を真摯に語りあい、それが届いて、ひとの心を動かすことによって、なにかが変わるというコンセプトだった。テクノロジーの進化は、ひとの想いを手繰り寄せながら繋げ、がんという病への想いの熱量は、ハッシュタグによって、ひとつのものにつながり紐づけられていくことで、計測可能な数値としてはじき出されて、想いが価値となっていく。こうしたWEB経由の対がん活動に対しては、本当のところ抵抗がないわけではなかった。見せたいものを見せたいように演出していく手法のような気がして、キラキ

ラしたがん対策は、どこかの誰かの気持ちをはじいていないだろうか、そこからこぼれおちるものの大きさに、少し足がすくんだ。

でも、医療は、暗闇のなかでも、毎日、光があたってもあたらなくてもつづいていく。

ワールドキャンサーデーは、これからもこうしたデジタル経由のコミュニケーションで、関係を紡いでいくこ

とになるだろう。リアルとデジタルの融合を図りながら、誰ひとり取り残さないがん医療実現を目指していくために、様々な想いを繋げていかななくてはならない。

あらためて、ほんとうにおもいます。この日のために心をつくしてくださった多くの方がた。ありがとうございました。



World Cancer Day 2021 Impact Report

Convening Members Partners

What a year it was. The final year of the 'I Am and I Will' campaign brought together the global cancer community, inspired powerful conversations and saw thousands of activities that helped to raise awareness and connected communities.

[Access the resource](#)

The numbers reveal growing enthusiasm around World Cancer Day. Over 840 activities and events in 116 countries have been registered on the Map of Activities....

[Read online](#)



2021年のUICC公式インパクトレポート

UICC 日本委員会加盟組織

愛知県がんセンター	(一社) アジアがんフォーラム	大阪国際がんセンター
神奈川県立がんセンター	がん・感染症センター都立駒込病院	(公財) がん研究会
(公財) がん研究振興財団	(公財) がん集学的治療研究財団	九州がんセンター
国立がん研究センター	埼玉県立がんセンター	(公財) 佐々木研究所
(公財) 札幌がんセミナー	静岡県立静岡がんセンター	(一社) 全国がん患者団体連合会
(公財) 高松宮妃癌研究基金	千葉県がんセンター	東京慈恵会医科大学
栃木県立がんセンター	新潟県立がんセンター	日本癌学会
(一社) 日本癌治療学会	(公財) 日本対がん協会	(一社) 日本乳癌学会
(特非) 日本肺癌学会	(公社) 日本婦人科腫瘍学会	東札幌病院
(公財) 北海道対がん協会	三重大学医学部附属病院	宮城県がんセンター

賛助会員 協和キリン株式会社(山極-吉田国際奨学金)
(公社) 日本放射線腫瘍学会

UICC日本委員会 2021年役員

委員長	野田 哲生(がん研究会)	UICC 本部	
幹事		Fellowship 委員	中釜 斉(国立がん研究センター)
総務	中釜 斉(国立がん研究センター)	TNM 委員	浅村 尚生(慶応大学医学部)
学術	垣添 忠生(日本対がん協会)	名誉会員	
財務	吉田 和弘(岐阜大学大学院医学系研究科)	井口 潔(元がん集学的治療研究財団)	
ARO担当	野田 哲生(がん研究会)	青木 國雄(元愛知県がんセンター)	
予防・疫学領域担当	浜島 信之(名古屋大学大学院医学系研究科)	富永 祐民(元愛知県がんセンター)	
事務局担当	大野 真司(がん研究会有明病院)	大島 明(元大阪府立成人病センター)	
監事	増井 徹(国立精神・神経医療研究センター)	武藤徹一郎(がん研究会)	
	池田 徳彦(東京医科大学)	北川 知行(がん研究会)	
専門委員会委員長		田島 和雄(元愛知県がんセンター、三重大学)	
疫学予防委員会	浜島 信之(名古屋大学大学院医学系研究科)	赤座 英之(元東京大学・筑波大学)	
喫煙対策委員会	望月友美子(前 日本対がん協会)	日本委員会事務局(がん研究会内)	
患者支援委員会	土岐祐一郎(大阪大学医学部)	神田 浩明(研究:幹事会担当)	
TNM委員会	佐野 武(がん研究会有明病院)	(埼玉県立がんセンター)	
広報委員会	河原 ノリエ(東京大学東洋文化研究所)	関本 敏之(事務:委員長業務補佐)	
小児がん委員会	中川原 章(佐賀国際重粒子線がん治療財団)		
対がん協会	石田 一郎(日本対がん協会)		
UICC-AsiaRegionalOffice (ARO)			
	野田 哲生(がん研究会)		

2022年度のUICC日本委員会総会は
7月23日(土) 12:00 ~ 14:30 経団連会館
(Web開催の場合 13:00 ~ 予定)

UICCホームページ : www.uicc.org
UICC日本委員会ホームページ : www.jfcr.or.jp/UICC
UICC-AROホームページ : <http://uicc-aro.org/>